

# 一七世紀～一八世紀における都市ハンブルクの経済事情

斯 波 照 雄

はじめに

都市ハンブルクの発展と財政

ハンブルクの醸造業の展開

植民地物産輸入拠点としての台頭

ハンブルク都市経済の転換

おわりに

## はじめに

三十年戦争中にハンザはノルウェーでの特権を失い、一六二五年にはシュレスヴィヒ・ホルシュタインとデンマークとの争いが生じるなど、ハンブルク Hamburg の周辺の混乱はしばらく継続し、旧来のハンザは事実上崩壊した。一六三〇年ハンブルクは、リューベック Lübeck、ブレーメン Bremen と三都市間の同盟を締結し、危急時の軍事的協力関

係を形成した。一六四六年にはブレームンも帝国都市となりその同盟は二〇世紀に至るまで継続されたのであった。<sup>(1)</sup>

三十年戦争の終結した一七世紀中葉には、ヨーロッパ社会では本格的な大洋貿易の時代に入り、特にその貿易港となった都市では急激な近代都市化が進展する。そうした港の一つであるハンブルクも一七世紀後半以降新大陸との貿易を拡大し、発展していく。他方、一六六九年にハンザ総会は開かれたものの集った都市代表は九都市にすぎず、結局これがハンザ最後の総会となった。それは都市が連帯して北海 *Nordsee*・バルト海 *Ostsee* 商業を展開する時代の終焉を意味していたといえよう。<sup>(2)</sup>

オランダがまず台頭し、続いてフランス、イギリスなどが台頭し世界貿易を展開していく中で、個々のハンザ都市はどのようにそれに対応し、繁栄を模索したのであるうか。各都市には個性があり、その答えはそれぞれの都市の個別研究の成果の集大成として述べられるべきであろう。しかし、その過程についての研究は以後大都市に成長したハンブルクに関しても必ずしも多いとはいえない。これまで我が国においてハンブルクに関する近代に至る歴史的な動向研究としては、中世から近世にかけてのハンブルクの商業に関する論考、また市の税収や基幹産業でもあったビール醸造業から経済構造を検討する若干の研究があげられる程度であった。<sup>(3)</sup> 近年、一七世紀から一八世紀のハンブルクについては、当時のイギリス、フランス、スペイン、オランダなどによる植民地物産を中心とした海洋貿易と関連してハンブルクの急成長の原因の検討を試みた研究、市の内陸貿易に関する研究が相次いで発表されてきた。<sup>(4)</sup> しかし、同時期の都市経済の変遷に関する検討はなお不十分であるように思われる。そこで本稿では当時のハンブルクの貿易の動向を視野に入れつつ、それと関連したと思われる都市の経済構造の変化とハンブルクが大都市に成長する過程を明らかにし、発展の要因について再検討してみたい。

## 都市ハンブルクの発展と財政

ハンブルクは一五一〇年に少なくとも名目上は帝国都市となり、事実上独立した都市として一六世紀半ばには人口も約二万人に成長した<sup>(5)</sup>。三十年戦争時には周辺地特に東側のポメルン Pommern やメクレンブルク Mecklenburg では人口は半分ほどに減少したといわれているが、ハンブルクでは人口は維持され、一六八〇年には五万八千人に、さらに一七一〇年には七万六千人に、一七五〇年には九万人へと増加し、一八世紀末には一〇万人に到達したといわれている<sup>(6)</sup>。この間の一七六八年には、自由と安全を維持し続けたハンブルクは名実ともに帝国都市として自立を果たしている<sup>(7)</sup>。

財政では歳入内容の変化として、まず、直接税と間接税の比率の変化があった。すなわち、一五世紀末まで直接税は間接税の三倍以上の額であったが、一六世紀にはほぼ同額になり、一七世紀前半には逆転して間接税の方が多くなり、その差は以後増す傾向にあった。しかも後述のように、そのうちのビール消費税は税収の約三分の一にもなったのであった。

一五世紀後半には二千七百リユーベックマルク Lübeck Mark (以下マルクと略す) 余であった関税収入は、一六世紀末には四万六千マルクと約一七倍に増加し、表1のように一七世紀前半には約一七万マルクにまで増加したのである。財政全体の規模から見ても、一五世紀後半には一四世紀後半の五倍余の二万三千マルクであった市の歳入は、一五六三年にはそれから六・五倍の一五万マルクに、そして一六三〇年にはさらに一〇倍以上の成長を遂げ、

表1 ハンブルクの関税収入（単位リユーベックマルクm）

	1603-19年	1631-50年	1716年	1746年	1775年	1800年
関税収入	79705	169246	212793	240177	198705	748867

（注）複数年の金額は年平均額

（出典）F. Kopizsch, Zwischen Hauptrezess und Franzosenzeit 1712-1806. Hamburg. Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner. Bd. 1. Hrsg. v. W. Jochmann/H. -D. Loose. Hamburg 1982. S. 374. K. Zeiger, Hamburgs Finanzen von 1560-1650. Hamburger wirtschafts- und sozialwissenschaftliche Schriften. Heft 34. Rostock 1936. S. 51-134.

一七〇万マルクにも達したのであった。<sup>(8)</sup>以後途中一七四六年に二五〇万マルクに減少するものの、一七一六年には三一〇万マルクであった市の総収入は、一七七五年には三二九万マルク、一八〇〇年には五八五万マルクへと飛躍的に増大していった。<sup>(9)</sup>

歳出において注目すべきは借入金増大に対応して、レント等借入金利息関連の支出が一六世紀を通じて二〇パーセント以上の高支出となり、一七世紀前半には財政規模の拡大にともない歳出に占める割合は低下したものの借入金利息の総額は増大し続けていることである。また、一六世紀初頭まで低かった封建権力者への貸付金が額においても歳出の割合においても急増している。戦時であり、年、時期によって相違はあるものの、一六三〇～一六五〇年の三十年戦争末期には支出全体の二四パーセントを占めるに至っている。

軍事費支出は、宗教改革期以後のシュマルカルデン同盟 Schmalkaldischer Bund と関連した一五二二～一五六二年の支出が年平均約二万八千マルク余にもほったものの、一六世紀後半には五～六パーセントであった。しかし、軍事費支出は三十年戦争の前期一六二〇～一六三〇年には五〇パーセントに、一六三〇年には百万マルク余、六〇パーセントを占めるに至り、市債の発行残高はそうした軍事費の増大によりさらに急上昇していったと考えられるのである。<sup>(10)</sup>しかし、三十年戦争後半の一六三一～一六五〇年にはわずかな財政額の増加はあったが、軍事費は支出全体の二三パーセントにまで低下した。他方で、事務管理出張費などの支出割合がほぼ一定である点からは市の健全な運営が感じられるし、

公共施設の建設や河川等の維持管理費などが一五世紀以降一六世紀後半まで二五パーセント前後の高い割合を維持しており、以後一七世紀には一〇パーセント台に低下するものの、額は九倍にも増加するなど、そこからは市が管理する地域の拡大、施設等の充実、補強が推測されるなど市の経済力の増強も見られる。こうした状況下で戦争終結に向けた会議が市内で頻繁に行われ、安全で自由な都市としての評価も向上したのではないかと推測されるのである。<sup>(11)</sup>

近世に入るとハンザに代わりオランダが台頭し、さらにはイギリスが急激に力をつけ、北海における貿易の主導権は移っていったにもかかわらず、政治的な自立とともに、人口、財政規模の変遷から見るかぎり、ハンブルクは一六世紀以降着実に成長し、しかも一七世紀末以降にその進行が加速していたことは事実であろう。ただし、そうした市の経済発展がそのまま市民生活に反映されたとは思えない。というのもハンブルクの穀物価格はもともと価格の高かったミュンヘン München、フランクフルト Frankfurt a. M. ほどではなかったとはいえ、一六一〇年代までに比べ、三十年戦争勃発後の二〇年代には二倍弱にまで大幅に上昇し、生活上必要な物資への消費税課税が進められ一七世紀前半には全般的な物価の上昇が生じていたと思われるからである。<sup>(12)</sup>

### ハンブルクの醸造業の展開

都市内消費のハンブルクビールへの課税率は一六世紀前半にそれまでの四倍に引き上げられ、その結果税収は確実に増加し、市の歳入増に貢献してはいるものの、ビールの消費量は減少している。<sup>(13)</sup>しかし、生産技術の改善や、おそらく品質の改良などの努力の結果、市のビール醸造量は一七世紀初頭には一五万樽にまで回復した。一七世紀初

頭に約三万八千マルク程度であった市のビール醸造業からの消費税収入は、一七世紀前半には約一五万マルクに、一七世紀中頃には約二〇万マルクに増加し、前述のように市の税収の約三分の一を占めるほどになったのである。<sup>(14)</sup>一五世紀後半から一六世紀半ば過ぎまで減少し続けた市内のビール消費量も一七世紀後半には急増していることから、ハンブルク市の醸造業は一七世紀に入ってから復活したと考えられるのである。すなわち、市内のビール消費量は一六八五年には一六世紀後半の六倍弱にも達し、一〇倍の課税強化によって実に約六〇倍ものビール消費税を市にもたらした。<sup>(15)</sup>市は一六六四／五年には醸造業から前年よりも五万マルク多い消費税収入を得ている。それは一六七五年から八五年には一七万五千マルクから二〇万マルクに、さらに一六八五年には一樽につき二マルクの課税が行われ二七万マルクにも達し、一六九〇年代には二六の醸造業者より二〇万から三〇万マルクが納められている。<sup>(16)</sup>これは市の人口が増加し、また、経済の活性化と市民の消費生活水準の向上があつてのことであろう。リユーベックがハンザの領袖として、常にオランダ、イギリスと対抗し、結果としてハンザと運命をともにしたのと異なり、ハンブルクはオランダ、イギリスから移住を受け入れた。ハンザがオランダと敵対している時でもオランダとの通商を維持し、他方、オランダと対抗関係にあるイギリスとも接近して一五六七年にはイギリスに商館を確保し、関税特権を獲得するなど政情不安定の中でも一貫して通商関係の拡大をはかつてきたのであつた。<sup>(17)</sup>それを可能にしたのは、立地条件に加え、ハンブルクが各地の商品の中継基地というだけでなく、ハンブルクには特産品に成長した優良なビールがあつたからであり、その販路拡大がはかられてきたからであると思われるのである。すなわち、品質の向上・維持と安定的な生産量による無駄のない供給は、良質かつ低廉なハンブルクビールの販路を拡大し、それと連動して他の商品流通も活発化し、一六八五年には二七万マルクの消費税収入をもたらしたと考えられるのである。<sup>(18)</sup>

しかし、一六七〇年代以降次第に流入量を増し、一八世紀初めには砂糖とならぶハンブルクの輸入額を記録したワインと、それに続いて流入し一七三〇年代以降急激に輸入額を増し一八世紀半ばには砂糖に次ぐ輸入額に至ったコーヒー、そして茶などの飲み物の普及によって市民は多様な飲料を消費するようになり、それまで飲料を圧倒的にビールに依存してきた市民生活からビール消費量を減少させた<sup>(19)</sup>。北ドイツではビールは「生活の潤いと糧」といわれ<sup>(20)</sup>、市内の有力商品としてハンブルク市での生産も盛んであったが、もはや旧来からの限定された醸造業者による厳格な規定のもとでの生産がビールの品質向上の弊害となる状況下で、市外各地からのビールが大量に流入するようになった<sup>(21)</sup>だけでなく、こうした市民生活の変化が市のビール醸造業の急激な衰退をもたらした。すなわち、一七世紀には市に一七の都市、地域から外地産ビールが流入していたが、一八世紀には五五、そのうち二〇がアルトナ Altona をはじめとする近隣地域からもたらされたものであった<sup>(22)</sup>。リューベックにおいて市周辺のビール醸造が禁止されても、すでに旧来の生産規定のもとでの市内の生産が、新たな生産法を積極的に取り込みながら生産された周辺地のビールに対抗できなかつたように<sup>(23)</sup>、一八世紀にはハンブルク市周辺や外地において新技術を導入し良質で安価なビールが生産され、それらが市に流入するようになり、結局、ハンブルクにおける旧来の生産規定のもとで生産される市のビール醸造業は停滞から衰退に至つたと考えられるのである<sup>(24)</sup>。一七五一年には醸造規定が改定され、ついに旧来のビール醸造に関する厳しい規制は解除された。一九世紀に入ると、一八一〇年には一七の醸造所において、それぞれ近代的施設への転換が行われ、規模も一八世紀のほぼ倍になったといわれるが、他の飲料消費の増加によりビールの消費は減少し、その消費税歳入は五万マルクから五万三千マルクであり、一世紀前の半分にも満たなかつた<sup>(25)</sup>。

しかも、一八世紀には以前にも増して醸造業は大商人のもとで展開され<sup>(26)</sup>、その大商人たちはむしろビールよりも諸

表2 近世ハンブルクのビール消費税収入（単位リュウベックマルクm）

	1603-19年	1631-50年	1675-85年	1685年	1711-20年	1810年
ビール消費税	37900	196659	197000	270000	131000	50000

（注）複数年の金額は年平均額

（出典）W. Bing, Hamburgs Brauerei vom 14. bis zum 18. Jahrhundert. Zeitschrift des Vereins für hamburgische Geschichte. Bd. 14. 1908. S. 311f.

外国産のワインや植民地物産の砂糖やコーヒー、茶などに利益を求めるようになったのではないかと思われる。すなわち、外洋からエルベ Elbe 河を約百キロメートルも遡った河口の港ハンブルクが植民地物産の集散地となったのは、外洋からはるかに内陸に入り込んだフランスワインの産地ポルドー Bordeaux に植民地物産が集まり、ワイン流通網が植民地物産の流通網として機能したように<sup>(27)</sup>、ビールと関連して成長してきた流通網が、新大陸から流入する大量の新商品など多様な商品の流入に対応したものへと移行、拡大していったことにもよると思われるのである。他方、ビールは多様な嗜好品の大量の流入とともに一八世紀初頭以降消費量は急激に減少し<sup>(28)</sup>、表2のように消費税収入は一七一〇〜一七二〇年には、外地産ビールにかけられた市内産ビールの二倍の消費税を含めても一三万一千マルクにまで減少している<sup>(29)</sup>。市のビール醸造業はローカルな産業になっていったと考えられるのである<sup>(30)</sup>。

### 植民地物産輸入拠点としての台頭

すでに、一七世紀初頭の三十年戦争の開始期までにはハンブルクでは西インド諸島からもたらされる砂糖の精製が盛んに行われ、ヨーロッパ各地に輸出されていた<sup>(31)</sup>。同世紀の前半にはオランダからの植民地物産貿易が活発となり、四二五家族のオランダ人がハンブルクに居住していたことが知られている<sup>(32)</sup>。同時期にはスペイン、ポルトガルから追放されたユダヤ人も移住し

てきており、また、一六一七年にはポルトガル人も百名程度居住していたといわれ、主に砂糖、香料などを輸入するイベリア貿易に従事していたといふ<sup>(33)</sup>。こうした事実は、確かにハンブルクの繁栄を示すものには違ひはなかったが、外国商人にハンブルク商人と同等の交易権を与え、外国人同士の自由な交易や会社の共同経営の自由を認めた結果、利を得たのは外国商人であつたともいわれている<sup>(34)</sup>。しかし、積極的に外国商人を受け入れたハンブルクと対照的に外国商人の活動を制限したリューベックを比較すると、明らかにリューベックの政策は失敗であり、ハンブルクの政策は経済発展に有効であつたともいわれる<sup>(35)</sup>。それは、一六一七年にデンマーク王クリスチャン Christian 四世がエルベ河口で関税の徴収を開始し、ハンブルクの自由貿易を妨害するなどの厳しい環境の中でもハンブルクの繁栄が維持され、以後の展開へと繋がつたことから明らかである<sup>(36)</sup>。

市に入港した船舶数では一六三三年にはオランダが九九四隻に対しイギリス、フランス船は合計でも八三隻にすぎず、オランダ船はイギリス、フランス船よりも小さな船舶であつたといえ圧倒的に多数を占めた<sup>(37)</sup>。一六二五年のハンブルク船による貿易も三分の一がオランダのものであつたといふ<sup>(38)</sup>。一七世紀前半の三十年戦争期からハンブルクでは植民地物産の流入が増大し<sup>(39)</sup>、その植民地物産の中継地の一つでハンブルクへの主要輸出港ポルドーには一六四〇〜一六四六年には一五九隻、一六七二〜一六七八年には九〇隻のハンブルク船が入港したといふ<sup>(40)</sup>。

表3のように一六七八年にはイギリス、スペインがオランダと並ぶ植民地物産取扱国となり、一八世紀初頭にはイギリスが植民地物産の約半分を扱うに至つたのである。一七世紀後半から一八世紀中頃にかけて、市への輸出額はイギリスからは八倍弱、フランスからは一五倍以上へと急増した。ロシアも約六倍の増加を示しているが、イギリス、フランスの四分の一にすぎず、ブラジル物産の輸入が増大したポルトガルではあつたが、さらにその半分以下であつ

表3 ハンブルクの植民地物産取扱主要国からの輸入額 (単位1000バンコマルクMk)

年	1678年		1703年		1706年	
イギリス	1362.2	23.6%	2730.9	50.6%	3253.3	53.3%
フランス	747.6	12.9%	273.7	5.1%	334.1	5.5%
オランダ	1206.3	20.9%	—		—	
スペイン	1362.4	23.5%	479.3	8.9%	975.0	16.0%
ポルトガル	469.1	8.1%	984.6	18.2%	350.2	5.7%
地中海地域	157.3	2.7%	220.1	4.1%	246.8	4.0%
ロシア	477.5	6.3%	710.0	13.1%	945.0	15.5%
	1713年		1751年		1760～80年代	
イギリス	2283.8	43.3%	12707.2	33.7%	14～18%	
フランス	1109.6	21.0%	13812.2	36.6%	51～60%	
オランダ	—		3314.9	8.8%	7～10%	
スペイン	663.1	12.6%	1105.0	2.9%		
ポルトガル	968.2	18.4%	1657.5	4.4%	14～17%	
地中海地域	248.0	4.7%	1547.0	4.1%		
ロシア	—		3591.2	9.5%	6～8%	

(注) 1760年代～80年代のみ全体の割合。

(出典) M. North, Von der Atlantischen Handelsexpansion bis zur den Agrarreformen (1450-1815). Hrsg. v. M. North, Deutsche Wirtschaftsgeschichte. München 2005. S. 150.

た。他方でスペインからの輸入額は減少し、ポルトガル以下になった。一七三〇年代からフランスのポルトとハンザ都市間の交易は拡大し、特に一七四〇年頃からハンブルクへの植民地物産輸出は増大した<sup>(41)</sup>。船舶数から見てもその頃からオランダ船が急減し、イギリス、フランス船が増加した結果、両国の船舶総数はオランダ船数に近づき、一七五一年にはイギリス、フランス船の入港数は百隻以上も多くなった。フランスからの輸入が増加したのはポルトー經由の植民地物産、例えばコーヒーなどの増加によるものであろう。一八世紀中頃には特にフランスからの物資流入の増加が顕著であり、以後、ハンブルク港への入港船舶数が約二千隻にも達する中で、フランス革命期に向けてフランスからのハンブルクの貿易輸入額は全体の五割を超えていく。逆に、オランダのハンブルク輸出は一七八九年には一〇パーセント以下に、入港船数の割合は二〇パーセントに低下した<sup>(42)</sup>。

ハンブルク船による植民地物産のズント海峡經由によ

表4 ハンブルク船による植民地物産のズント海峡經由年平均輸出量(単位1000ポンドPfd)

年	1701-10	1711-20	1721-30	1731-40	1741-50	1751-60	1761-70	1772-81
	38	113	1618	1073	2322	3170	8792	8450

(注) 突出した数値を示す1771年を除外して作成。また、ハンブルク船とは船長の居住地がハンブルクである船舶。

(出典) Tabeller over Skibsfart og Varetransport gennem Øresund 1661-1783. Anden Del: Tabeller over Varetransporten. Udgivet ved N. E. Bang/K. Korst. Førster Halvbind: 1661-1720. København 1939. Andet Halvbind I: 1721-1760. København 1955. Andet Halvbind II: 1761-1783. København 1953. より作成。

る再輸出は、表4のように一八世紀の一〇年代まではわずかであり、例えば北方戦争との関連で北欧地域の交易の安全が確保されなかったと思われる一七〇一〜一七一四年には取引の記録は少ない。北欧の政治的安定が確保される中でハンブルク船による海峡經由の植民地物産輸出は一七二〇年以降本格化し、また、ハンブルクからの各国船による植民地物産の輸出も一八世紀中頃には増加し、いずれも同世紀の六〇年代から七〇年代にかけて急増した。<sup>(45)</sup>

一八世紀後半にはイギリスが航海条例を發布して植民地貿易の独占をはかるが、ハンブルクはその適用除外を受け、交易を続行することができた。<sup>(46)</sup> 植民地におけるイギリスとフランスの対立は強まり、フランスは西インドにおける砂糖生産などを積極的に進めていたものの、結局一七六三年のパリ条約でイギリスがフロリダなどを得て北米海域の覇権を掌握した。一八世紀末の九〇年代初頭になると、おそらくはフランス革命の影響によりボルドーからの輸入が急減し、それに代わるようにロンドン London からの物資が急増した。それ以降、イングランド、アメリカからの輸入割合が増加している。そのうちイングランド經由でもたらされるジャマイカ産の砂糖が急増している。だがそれは、九〇年代でも約一〇パーセントにすぎない。しかし、ロンドンから輸入される砂糖の総額は、一七九五年にはボルドーからの総額が減少したことともない、ボルドー經由を越え、以後も増加し続けた。<sup>(47)</sup> 一七五〇年頃からハンブルクは植民地物産の集散地として

台頭したといわれているが、それにはフランスが、続いてイギリスが重要な役割を果たしたことを示しているように思われる。一八〇〇年頃の植民地物産は輸入全体の一九パーセントにも達したのであった。<sup>(48)</sup>また、ハンブルクからバルト海地域への海路による植民地物産の輸出は、一時減少したものの、表4のように以後着実に成長していった。一七四〇年代には約二三三万ポンド余に達し、六〇年代にはさらに四倍に急増し、総量約八八〇万ポンドにも達したのであった。<sup>(49)</sup>その後、一七九六年には独立後間もないアメリカ合衆国から二三九隻にも及ぶ船舶がハンブルク港に入港してもいる。<sup>(50)</sup>

さらに、一九世紀初頭のナポレオン戦争後、ハンブルクではブラジル等からの商品が直送されるようになって、フランス経由の流入割合は減少した。植民地からの物資と、地中海地域、中欧地域からの工業製品の集散地ともなり、両商品の中継地、交易地としての意義を増したと考えられる。<sup>(51)</sup>

植民地物産の主要な再輸出港に成長したハンブルクであったが、社会環境の変化の中で、取引国はオランダからフランス、イギリスへと変化し、そして一八世紀にはイングランド特にロンドンとの関係が強化されるなどの変遷があった。輸出先としてもエルベ河上流特にライプツィヒ Leipzig 等の都市との関係強化も進み、イギリスを中心とする世界の貿易体制の一端を担うハンブルクを中心とする物流システムとして機能していったといえよう。<sup>(52)</sup>

### ハンブルク都市経済の転換

以上のように、ハンブルクの発展には明らかに近世における経済基盤の転換が関係していたと考えられるのである。

というのも、ハンブルクと中世後期に同様にビール醸造業が成長し、輸出産業として展開していたバルト海に面した都市ヴィスマール Wismar では一七世紀中頃を頂点にビール醸造業が斜陽化してくると都市経済全体が停滞し、以後その傾向が転換することはなかった。<sup>(53)</sup> たしかに、ハンブルクは、北海という大西洋に直接つながる大洋に面し、植民地貿易で中心的役割を果たしたイギリスに向かい合っていたこと、しかも大型船舶の入港できる港湾施設があり、北海の最東端に位置し、エルベ河奥地まで広い後背地を有したことなど有利な条件はあった。それに加えて、スペイン、フランスから東方バルト海方面への物資輸送の中継地として格好の位置にあり、他方で、大陸側の港がイギリスとは対抗関係にあったスペイン、フランス、オランダなど中央集権国家の港であったことから、イギリスから、あるいはイギリス船によるヨーロッパの大陸向け商品の輸送拠点へと成長したのであった。しかも、国家の干渉のない独立した自由都市であったこともハンブルクが植民地物産の集散地として有利であったと思われる。しかし、それ以上に重視したいのは、ハンブルクは中立の自由都市として、ハンザ都市でありながらハンザとイギリスが戦争中にもかかわらずイギリスとの交易を続け、マーチャント・アドベンチャラーズ Merchant Adventurers にもその活動を認め、ユダヤ人を積極的にむかえ入れ、それらネットワークを利用した商業を展開してきた点である。市民と外国人の経済活動も広く認められ、<sup>(54)</sup> オランダ台頭の過程で、植民地物産の集散地としてアムステルダム Amsterdam とともに発展したのも、例えば一五七〇年代には千人、一五八五年以降には二千人にもほる多数のオランダ人が移住、居住していたからであると考えられるのである。<sup>(55)</sup> そうした外国人を含めた自由な居住、自由な経済活動が維持されたその延長線上に、イギリスのロンドンを中心とした植民地貿易と関連したハンブルクの繁栄があるのではないかと思われるのである。

また、エルベ河を利用した河川および運河を利用した内陸輸送の拠点であったことも市の繁栄要因の一つであろう。すなわち、上流にはドレスデン Dresden、ライプツィヒなどの内陸の拠点都市があり、一四世紀末に完成したエルベ河沿いのラウエンブルク Lauenburg からシュテクニッツ Stecknitz 運河を利用してリュューベックに至る商品輸送など河川、運河経由でバルト海への船舶による物資輸送も可能であったのである。例えば、一七世紀のエルベ河奥地のピルナ Pirna の商人のハンブルク出入りの多様な取り扱い商品の記録が残されている。<sup>(56)</sup> おそらくは、菊池氏が指摘するように治安、政策、需要、輸送費、輸送方法、季節など商業条件に応じて弾力的に選択されたのであろう。<sup>(57)</sup> エルベ河をかなり上流に遡った地点にあるハンブルクにもたらされた商品を再び北海からユトランド Jutland 半島を迂回してバルト海に至るよりも内陸河川を利用する方が合理的であったのかもしれない。あるいは、大洋を航行する大型船舶が広い地域を対象とした各種商品をまとめて輸送したのと異なり、ある河川沿いの限られた都市別に商品を輸送するには河川用船舶は都合がよかったのかもしれない。一八世紀中頃にはマクデブルク Magdeburg 経由の砂糖の内陸貿易の拡大が知られている。一七五〇年代後半には八〇万フローリン Florin であったのが七〇年代後半には一四〇万フローリンに増加しているの<sup>(58)</sup>である。同時期にはリュューベック経由でダンツィヒ Danzig にもたらされた植民地物産の砂糖、コーヒーの金額が増大しているが、リュューベックまでは内陸貿易路が利用された可能性が高い。こうした内陸輸送は一九世紀には大きく発展し北部内陸地方は運河網で結ばれていったのである。<sup>(59)</sup>

前述のようにハンブルクでも一八世紀には旧来の規定に基づいて生産されたビールは、周辺地域で自由に新しい技術によって安価に生産された良質のビールに敗北し、急速に衰えていった。これに対し、一七〇〇年代初頭以来近隣港からのワインが急激に流入してきた。一七〇三年には九七〇 MK (バンコマルク) であった輸入額は二年後には百倍

表5 ハンブルクのワイン輸入額 (単位バンコマルクMk)

	1703年	1706年	1713年
ワイン輸入額	441500	733656	934721

(出典) E. Baasch, Zur Statistik des Ein- und Ausfuhrhandels Hamburgs Anfang des 18. Jahrhunderts. Hansische Geschichtsblätter. Bd. 54. 1929. S. 90-116.

表6 ハンブルクのワイン消費税収入 (単位リュベックマルクm)

	1700年	1705年	1706年	1710年	1715年	1720年
ワイン消費税	11493	10905	58951	23269	37128	69520

(出典) E. Baasch, Weinakzise und Weinhandel in Hamburg. Zeitschrift des Vereins für hamburgische Geschichte. Bd. 13. S. 137.

の一〇万Mkに増加した<sup>(60)</sup>。以後近隣地域からもたらされるワインは減少するが、ワイン全体の輸入額は、年による増減もあるが増加をしていく(表5参照<sup>(61)</sup>)。一七〇六年の課税強化の影響が大きいとはいえず、表6のようにワイン消費税が一八世紀初頭以降急激に増加する<sup>(62)</sup>。市内消費の増大とやらんで旧来のビールの流通網を利用した中継あるいは再輸出も増大したであろう。すなわち、ポルドーのワイン輸出のネットワークがフランスの植民地物産輸出の拠点となる上で重要な役割を果たしたと考えられているように、ハンブルクではビールの販売と関連したネットワークがワインや植民地物産の再輸出上重要な役割を果たしたのではないかと考えられるのである<sup>(63)</sup>。ビールを輸出していた商人層がワイン、特にポルドーからのワインの再輸出に転じていくことも十分に考えられることである。続いて植民地物産として砂糖が輸入額の上位を占めるようになり、一七三〇年代以降その地位は不動のものとなる<sup>(64)</sup>。ハンブルクにおいては精糖費用が他の地よりも安価であり、不動産所有など特別な条件等を必要としなかったことなどがその理由といわれている。砂糖貿易を主導したのはユグノー Huguenots たちであったといわれている<sup>(65)</sup>が、ポルドーからワインを輸入していたハンブルクの商人がポルドーに入荷する植民地物産の輸入商としても事業展開していくことは自然のようにも思われる。そして、一七三〇年代以

降に急増したコーヒーが、四〇年代以降砂糖に次ぐ植民地物産として定着する。<sup>(66)</sup>

一七世紀末以降ハンブルクに流入してきた近隣のビールに屈した市のビール醸造と関連した大商人の以後の動静は明らかではない。衰退していく産業およびそれと関連した商業、他方新たに成長してくる貿易、それらの研究はそれぞれ行われてはいるが、両者の関連を問う論考は見当たらないのである。今後の課題であろう。しかし、ビールの輸出から次にはワイン、さらには植民地物産と中心となる取扱商品は変化していくが、ハンブルク商人は、例えばツェンツナー J. Zentner は大規模な手形取引とともに植民地物産取引を行っていたし、商人の中にはシックラー G. Schickler のように銀行家であると同時に精糖工場の経営者になる者も登場するなど、その時々で旺盛な経済活動を展開していたのである。<sup>(67)</sup> ビール流通網は、ワインの中継や再輸出さらには植民地物産の流通網としてそうした商人によって改善されつつ利用され、その結果ハンブルクは植民地物産の集散地として以後の急速な発展につながっていったのではないかと思われるのである。

当時のハンブルクの海上輸送用船舶は、ブレーメンの船に比べ小さかったともいわれるが、船舶数は一八世紀後半から一九世紀初めにかけて二倍以上に急増し、輸送力は大幅に増大し植民地物産の大集散地へと成長した。それは以後のハンブルク港の施設の充実につながり、砂糖をはじめ植民地物資の急増、そしてハンブルク経済の急成長につながるものであったといえよう。<sup>(68)</sup>

## おわりに

ビール醸造業の発展を一因として発展してきたハンブルクであったが、一八世紀初頭以降の醸造業の急激な衰退にもかかわらず、経済活動を活発に行い、人口が増加しているのは、市の経済を支える経済基盤が変化した事を示していると考えられる。すなわち、まさにその時期に、近隣を中心に外地からもたらされたビールが市産ビールを衰退に導き、続いて大量のワインが流入し、さらに、市民生活を、あるいは広くは北ヨーロッパの食生活を大きく変化させるような植民地物産が大量に流入したのである。植民地貿易の急激な発展によって砂糖、コーヒー、茶などが流入し、ハンブルクでは精糖業が急速に展開し始めたのである。植民地物産の北ヨーロッパの一大集散港としての新たな商工業の展開は、市に急激な人口の増加をもたらし、以後のハンブルクの大発展の契機になったのではないかと考えられるのである。

当初はスペインやポルトガルから、続いてオランダ、一八世紀にはイギリス、そしてフランスからとハンブルクにもたらされる植民地物産取引の中心国が変化していく中で、外洋からはるかに切り込んだハンブルクに多くの物資がもたらされた一因は、大洋に直接つながる北海に面し、エルベ河上流に広い後背地を有するなどの立地条件や中立の開かれた自由都市で安全であったことであろうが、外国人の自由な経済活動の容認やそのネットワークの活用に加え、ワインにおけるポルドーと同様に既存のビール販売のネットワークが存在したからではなかったか。一七世紀に再生し、同世紀後半に最盛期をむかえたビール醸造業のネットワークを維持、支配してきた商人たちが以後の商工業の展

開にどのようにかかわったか明らかではないが、彼らがその流通網を生かして何らかの形で市のワイン貿易、さらには植民地物産貿易を導いたと考えることは自然なことではなからうか。

- (1) 明石欽司「ハンザ」と近代国際法の交錯(一)、(二)―十七世紀以降の欧州「国際」関係の実相―『法学研究』(慶応義塾大学)、第七九巻第四号、二〇〇六年、一―二五頁、第五号、二〇〇六年、一―二六頁参照。
- (2) O.Brandt Geschichte Schleswig-Holsteins. Überarbeitet und erweitert v. W. Klüver. Kiel 1976. S. 182-196. A. Wohlwill. Aus drei Jahrhunderten der hamburgischen Geschichte (1648-1888). Jahrbuch der hamburgischen Wissenschaftlichen Anstalten. XIV. Hamburg 1897. S. 1-145. 高村象平「ドイツ・ハンザの研究」日本評論新社、一九五九年、二〇三―二二三頁。高橋理「ハンザ「同盟」の歴史―中世ヨーロッパの都市と商業」創元社、二〇一三年、二六二―二七〇頁。
- (3) 例えば、谷澤毅「北欧商業史の研究―世界経済の形成とハンザ商業」知泉書館、二〇一一年、二二四―二五六頁。斯波照雄「ハンザ都市とは何か―中近世北ドイツ都市に関する一考察」中央大学出版部、二〇一〇年、一四九―一六八頁。同「中近世ハンザ都市におけるビール醸造業について」『商学論纂』第五五巻第一・二号、二〇一三年、一三七―一五四頁。同「中世末期のハンザ都市の税収について」佐久間英俊、木立真直編「流通・都市の論理と動態」中央大学出版部(中央大学企業研究所研究叢書三六)、二〇一五年。このほか中世ハンブルクで勃発した市民抗争については同「中世ハンザ都市の研究―ドイツ中世都市の社会経済構造と商業」勁草書房、一九九七年、八九―一二三頁。また法制史の側面からの研究として、稲元格「中世ハンブルクの市民協定」『近畿法学』第六〇巻第一号、二〇一二年、一八五―二三八頁がある。
- (4) 玉木俊明「北方ヨーロッパの商業と経済 一五五〇―一八一五」知泉書館、二〇〇八年。同「近代ヨーロッパの誕生 オランダからイギリスへ」講談社選書メチエ四四八、二〇〇九年、一二六頁以下。同「先生も知らない世界史」日本経済新聞出版社(日経プレミアムシリーズ)、二〇一六年、九八―一〇五頁。菊池雄太「ヨーロッパ商業におけるハンブルクの役割(一七―一八世紀)」『比較都市史研究』第二七巻第一号、二〇〇八年、一三一―二五頁。同「ハンブルクの陸上貿易一六三〇―一八〇六年―内陸とバルト海への商品流通」『社会経済史学』第七八巻第二号、二〇一二年、二七―五一頁。同「近世ハン

- ブルクのバルト海上貿易―中継貿易都市の流通構造に関する一考察―』『社会経済史学』第七九卷第二号、一〇九―一二六頁。同「ハンブルクにおける西・南ヨーロッパ外来商人のイベリア貿易とバルト海地方（十七世紀前半）―商品取引・制度・ネットワーク―』『香川大学経済論叢』第八七卷第三・四号、二〇一五年、二八九―三一九頁。
- (5) H. Reincke, *Forschungen und Skizzen zur hamburgische Geschichte. Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der Hansestadt Hamburg*, Hamburg 1951. S. 171.
- (6) 斯波『ハンザ都市とは何か』一五〇頁。W. Bohelart .. nicht brothlos und nothleidend zu hinterlassen. Untersuchungen zur Entwicklung des Versicherungsdankens in Hamburg. Hamburg 1985. S. 14. 人口の推移には諸説があるが、一七世紀から一八世紀にかけて市の人口増加が著しかったと考へられる点に共通している。W. Jochmann, *Hamburg: Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner*. Bd. 1. Hamburg 1982. S. 366. Reincke, *Forschungen und Skizzen*. S. 173-175. H. Reincke, *Bevölkerungsprobleme der Hansestädte. Hansische Geschichtsblätter* (ズレ H Gbl ヲ整ヤ). 70. 1951. S. 21. 28.
- (7) Ph. Dollinger, *The German Hansa. Translated and edited by D. S. Ault/S. H. Steinberg*, London 1970. pp. 313-329. R. Postel, *Beiträge zur hamburgischen Geschichte der Frühen Neuzeit. Geschichte und Wissenschaft*. Bd. 18. Hamburg 2006. S. 153. 高橋『前掲書』二六二頁。
- (8) 斯波『ハンザ都市とは何か』七六、一五八―一五九頁。
- (9) F. Köpizsch, *Zwischen Hauptrezess und Franzosenzeit 1712-1806. Hamburg. Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner*. Bd. 1. Hrsg. v. W. Jochmann/H.-D. Loose. Hamburg 1982. S. 374.
- (10) P. C. Plett, *Die Finanzen der Stadt Hamburg im Mittelalter (1350-1560)*. Phil. Diss. Hamburg Univ. S. 178-180, 254-256. K. Zeiger, *Hamburgs Finanzen von 1560-1650. Hamburger wirtschafts- und sozialwissenschaftliche Schriften*. Heft 34. Rostock 1936. S. 103. J. F. Voigt, *Die Anleihen der Stadt Hamburg während der Jahre 1601 bis 1650. Zeitschrift des Vereins für hamburgische Geschichte* (ズレ ZVHG ヲ整ヤ). Bd. 17. 1912. V. gl. v. H. Reincke, *Hamburger Stadtschuld der Hansezeit (1300-1563). Städtewesen und Bürgertum als geschichtliche Kräfte. Gedächtnisschrift für F. Rörig*. Hrsg. v. A. v. Brandt/W. Koppe. Lübeck 1953. S. 499f.
- (11) C. V. ウェッミンウット、瀬原義生訳『ドイツ三十年戦争』刀水書房、二〇〇三年、五一二、五五四頁。

- (12) W・アーベル、寺尾誠記『農業恐慌と景気循環―中世中期以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史―』未來社、一九七二年、三七二―三七三頁。
- (13) W. Bing, Hamburgs Brauerei vom 14. bis zum 18. Jahrhundert ZVhG. 14. 1908. S. 302. H. Huntemann, Bierproduktion und Bierverbrauch in Deutschland vom 15. bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts. Phil. Diss. Göttingen Univ. 1970. S. 142f.
- (14) 斯波『ハンギ都市とは何か』一五九頁。
- (15) Bing, op. cit., S. 315. Huntemann, op. cit., S. 95.
- (16) Bing, *ibid.*, S. 311.
- (17) E. Wisckemann, Hamburg und die Welthandelspolitik von den Anfängen bis zur Gegenwart. Hamburg 1929. S. 76f. 高橋『前掲書』一〇六頁。
- (18) Bing, op. cit., S. 314.
- (19) C. v. Blanckenburg, Die Hanse und ihr Bier. Brauwesen und Bierhandel im hansischen Verkehrsgebiet Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte. Hansische Geschichtsquellen (ズレ HgG 2 卷 7). Neue Folge. Bd. LI. Köln 2001. S. 62. E. Baasch, Weinakzise und Weinhandel in Hamburg. ZVhG. Bd. 13. 1908. S. 104. Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels im 18. Jahrhundert. Hrsg. v. J. Schneider/O. Kraewel/M. Denzel. Historische Statistik von Deutschland. Bd. 20. St. Katharinen 2001. S. 287-588.
- (20) Huntemann, op. cit., S. 186f.
- (21) Bing, op. cit., S. 309f. 319f.
- (22) Bing, *ibid.*, S. 319.
- (23) K. Fritze, Bürger und Bauern zur Hansezeit. Abhandlungen zur Handels- und Sozialgeschichte. Bd. 16. Weimar 1976. S. 50-53.
- (24) Bing, op. cit., S. 314-320.
- (25) Bing, *ibid.*, S. 326. Huntemann, op. cit., S. 169, 176, 186ff.
- (26) E. Baasch, Die Handelskammer zu Hamburg 1665-1915. Hamburg 1915. Bd. I. S. 224f. Bd. II. S. 431.

- (27) 玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』二八五頁および同頁注五八参照。ボルドーが植民地物産のバルト海地域への再輸出拠点になった一因はパリ市場につながらなかったからであるとも考えられている。君塚弘恭「近世フランスの北大西洋世界―港湾ネットワークからみた多重経済構造」田中きく代／阿河雄二郎／金澤周作編著『海のリテラシー―北大西洋海域の「海民」の世界史』二四四―二四五頁。
- (28) E. Basch Zur Statistik des Ein- und Ausfuhrhandels Hamburgs Anfang des 18. Jahrhunderts. HGBll. Bd. 54. 1929. S. 140f.
- (29) Bing op. cit. S. 315, 319.
- (30) Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels. S. 304f. Bing, *ibid.*, S. 327-329.
- (31) ウェットシュワット、前掲書、三三三頁。
- (32) J. Kulischer. Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit. Bd. 2. Darmstadt 1976. S. 257f. Vgl. F. Voigt. Haushalt der Stadt Hamburg 1601-1650. Hamburg 1916.
- (33) Dollinger op. cit. p. 356.
- (34) Dollinger, *ibid.*, pp. 356f. 例えば、一五九〇年にハンブルク港にブラジルから入港した船の所有者を見るとハンブルク市民三名、オランダ人二名、ポルトガル人一名であった。
- (35) Dollinger, *ibid.*, p. 362.
- (36) Dollinger, *ibid.*, p. 363. クリスチャン四世のエルベ河口での関税徴収は一六四三年にデンマークがスウェーデンとの戦争で敗北するまで続いた。
- (37) J・ド・フリース／A・ファン・デア・ワウデ、大西吉之／杉浦未樹訳『最初の近代経済―オランダ経済の成功・失敗と持続力一五〇〇―一八一五―』名古屋大学出版会、二〇〇九年、四五九頁。
- (38) Kulischer, op. cit. S. 257.
- (39) E. Nisse. Hamburg in der Zeit des Dreissigjährigen Kriegs. Hamburg 1990. S. 41.
- (40) P. Voss. »Eine Fahrt von wenig Importanzt?« Der hansische Handel mit Bordeaux 1670-1715. Niedergang oder Übergang? Zur Spätzeit der Hanse im 16. und 17. Jahrhundert. Hrsg. v. A. Grassmann. Hgq. Neue Folge. Bd. XLIV. Köln 1998. S. 101f.

- (41) Voss, *ibid.*, S. 94f.
- (42) E. K. Newman, *Anglo-Hamburg trade in the late seventeenth and early eighteenth centuries*, Phil. Diss. University of London, 1979, p. 69.
- (43) Kulischer, *op. cit.*, S. 257.
- (44) ヌ・ノリース／ノマン・デマ・ワウデ、前掲書、三九七、四五八―四五九頁。
- (45) Tabeller over Skibsfart og Varetransport gennem Øresund 1661-1783. Anden Del: Tabeller over Varetransporten. Udgivet ved N. E. Bang/K. Korst. Andet Halvbind I: 1721-1760, København 1955. Andet Halvbind II: 1761-1783. København 1953.
- (46) Kulischer, *op. cit.*, S. 257.
- (47) Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels, S. 383-587. 玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』二七五―二七八頁。
- (48) F. W. Henning, *Das vorindustrielle Deutschland 800 bis 1800*, Paderborn 1974, S. 270. 柴田英樹訳『ドイツ社会経済史 工業化前のドイツ』八〇〇―八〇〇』学文社、一九九八年、二一九頁。
- (49) B. Schmit, *Hamburg im Zeitalter der Französischen Revolution und Napoleons (1789-1813)*. Teil I. Beiträge zur Geschichte Hamburg. Bd. 55. Hamburg 1998, S. 745ff. Tabeller over Skibsfart. Andet Halvbind I, S. 351, 371, 390, 425, 442, 461, 480, 500, 521. Andet Halvbind II, S. 3, 22, 41, 62, 83, 105, 126, 148, 171, 194, 222, 244, 269, 293, 317, 341, 364, 387, 410, 448, 461, 484, 510. Vgl. Newman, *op. cit.*, pp. 84, 161f. ポントはノンブルンでは当時通貨単位としても使われており金額の可能性もなるとはいえなが、他の商品が重量で示されているのに、植民地物産のみが金額で示されたと考えるのは不自然であり、重量と比べ。
- (50) Kulischer, *op. cit.*, S. 257.
- (51) 玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』二九六―二九八頁。
- (52) 玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』二九八―三〇三頁。
- (53) F. Techen, *Das Brauwerk in Wismar*. II, HGBll. 1916, S. 165-167.
- (54) Dollinger, *op. cit.*, pp. 312f. 324-329, 356f. 高村、前掲書、二〇三―二〇九頁。玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』二八五頁。

- (55) 石坂昭雄「十六世紀におけるネーデルラント・プロテスタントのドイツ散在―その経済史的意義」『北海道大学経済学研究』第二七巻第一号、一九七七年、三四五頁。
- (56) K. Blaschke, *Elbschifffahrt und Elbzölle im 17. Jahrhundert*, HGBll. 82, 1964, S. 49f. 谷澤「前掲書」二三八―二五六頁。
- (57) 菊池「ハンブルクの陸上貿易」二七一―五二頁。
- (58) R. Ramcke, *Die Beziehungen zwischen Hamburg und Österreich im 18. Jahrhundert*, Kaiserlich-reichsstädtisches Verhältnis im Zeichen von Handels- und Finanzinteressen, Hamburg 1969, S. 206.
- (59) M. Eckold (Hrsg.), *Flüsse und Kanäle. Die Geschichte der deutschen Wasserstrassen*, Hamburg 1998, S. 20.
- (60) Baasch, *Zur Statistik des Ein- und Ausfuhrhandels Hamburgs*, S. 92.
- (61) Baasch, *ibid.*, S. 113. 菊池「ヨーロッパ世界商業におけるハンブルクの役割」二七頁。
- (62) Baasch, *Weinakzise und Weinhandel in Hamburg*, S. 90-116.
- (63) 玉木「北方ヨーロッパの商業と経済」二八五、二九〇―二九二頁。斯波「中近世ハンザ都市におけるビール醸造業」一四七―一五四頁。Eckold (Hrsg.), *op. cit.*, S. 173ff.
- (64) Baasch, *Zur Statistik des Ein- und Ausfuhrhandels Hamburg*, S. 113. *Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels*, S. 383-587. 一九世紀初頭には精糖業、砂糖貿易はハンブルクにとって極めて重要な産業に成長した。A. Petersson, *Zucker- und Zuckergewerbe und Zuckerhandel in Hamburg im Zeitraum von 1814 bis 1834*, Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte (ZfW) VSWG, 25 (1956), Beiheft 140, 1998, S. 31-114.
- (65) H. Kellenbenz, *Sephardin an der unteren Elbe. Ihre wirtschaftliche und politische Bedeutung von Ende des 16. bis zum Beginn des 18. Jahrhunderts*, VSWG, Beiheft 40, S. 203ff. I. Pantel, *Die hamburgische Neutralität im Siebenjährigen Krieg. Veröffentlichungen des Hamburger Arbeitskreises für Regionalgeschichte*, Bd. 32, Berlin 2011, S. 38f.
- (66) *Statistik des Hamburger seewärtigen Einfuhrhandels*, S. 278-588. 菊池「ヨーロッパ商業におけるハンブルクの役割」二八一―二九頁。ハンブルクのコーヒー輸入量は一八七〇年代以降さらに増加していった。南直人『食』から読み解くドイツ近代史』ミネルヴァ書房、二〇一五年、五八頁参照。
- (67) Kulischer, *op. cit.*, S. 277.

- (8) T. Siewe, *Der Kampf um die Reform in Hamburg 1789-1842*. Hamburg 1993. S. 49. Henning, op. cit., S. 274. 柴田 訳、前掲書、二八二頁。Vgl. P. Dohse, *Der deutsche Zuckerhandel*. Phil. Diss. Köln Univ. Köln 1926. S. 82f.

(本学商学部教授)